

滋賀県には人びとの原郷観を喚起する景観が満ちあふれています。湖と山々の間には長い歴史と文化に育まれた懐かしい故郷が点在します。どんな場所もそれは俳人たちが詠いたくなるような人の長い営みが創りあげてきた文化的景観なのです。

1. 琵琶湖と俳句

近江を愛した芭蕉と近江の門人たちをはじめとして多くの俳人たちが琵琶湖とその周辺の人びとの暮らしや生業を詠んできました。このことは近代になっても続いてきたし、現在でも続いています。どうして滋賀県の文化的景観が詩人たちを魅了するのかわかえば、それはやはり夏になれば万緑の山々がみえ、冬になると冠雪した比良や鈴鹿を望むことができるところに人が生活しているからです。そして何よりもその真ん中に琵琶湖が控えていて水のある生活と景観が展開していることが、詩人たちを魅了してきました。

芭蕉は近江で102句もの句を詠んでいます。そして近江には芭蕉の門人たちが多いのです。彼らは琵琶湖の大景(造化つまり自然と人事のすべて)、中景(自然と労働)そして小景(自然と生活)を詠んでいます。17世紀の俳人たちが詠んだ湖と人の関係を紹介してみます。



写真2-5-1 奥琵琶湖より湖を望む

(1)大景

稻むしろ近江の国の広さ哉
浪化
(浪化…京と井波をよく往復した住職で蕉門)

蜻蛉や日は入りながら鳩のうみ
惟然
(惟然…美濃の人で蕉門、琵琶湖畔をよく歩く)

湖の水まさりけり五月雨
去来
(去来…京の蕉門、梅雨時の琵琶湖の大観)

海はれてひえふりのこす五月かな
芭蕉

人によりどの句が気に入るのか異なるけれども、いずれの句も真ん中に琵琶湖を湛える近江の「ひろやかな景」を詠んでいます。そして近江が古代以来歴史の堆積した地であり景観が「はるかなる歴史」を潜ませていることが原郷感を覚醒させるのです。



(2)中景

17世紀には琵琶湖を生業の場として鮓を専門にとる漁があったことが左の句でわかります。また鱒船も帆かけ船も北陸や北国の産物を京や大坂に運んだ丸子船です。京の棒鱒料理や鯨蕎麦は丸子船がもたらしたものです。

時雨れきや並びかねたる鮓ぶね

千那

(千那：堅田・本福寺の住職で蕉門)

鱒船や比良より北は雪げしき

李由

(李由：彦根・明照寺の住職で蕉門)

けふ限の春の行衛や帆かけ船

許六

(許六：彦根藩士で蕉門)

(3)小景

琵琶湖の特産物を詠った句と丸子船の運んだ商品の句を並べてみました。江鱒(アメノイオ)はビワマス、氷魚(ヒウオ)は稚鮎のことで芭蕉は氷魚の釜揚げを食べたにちがいない。干鱒は丸子船の運んだもので近江では庶民も食べていました。庶民もホンモロコを焼いて食べていたのですから琵琶湖は人びとと強いつながりがあったことがわかります。

霰せば網代の氷魚を煮て出さん

芭蕉

(氷魚は稚鮎のこと、大津での句)

小路から諸子焼くかや春の雨

木導

(木導：彦根藩士で蕉門、諸子はホンモロコ)

やきものは近江なりけり江鱒

諷竹

(諷竹：大坂の蕉門、やきものは信楽焼だろう)

躑躅生けてその陰に干鱒割く女

芭蕉

(石部の茶室で詠んだとされる)



写真2-5-2 氷魚(ヒウオ=鮎の稚魚)の釜揚げ



写真2-5-3 本諸子(ホンモロコ)の素焼き

※写真(2-5-1,2-5-2,2-5-3):琵琶湖博物館 金尾滋史氏 提供

琵琶湖博物館(名誉館長) 篠原 徹